

〈高木侃先生追悼〉 高木先生からいただいた言葉と宿題

坂 詰 智 美

(専修大学法学部准教授)

1 「三くだり半」イコール高木先生

高木侃先生は平成三〇(二〇一八)年一月二日に逝去された。先生は昭和一七(一九四二)年の一月四日が誕生日だったので、あと一月ちよつとで喜寿のお祝いを迎えるはずであった。

高木先生は、誰もが知る、「三くだり半」研究の第一人者である。論文・史料集の発表だけにとどまらず、縁切寺満徳寺資料館の館長をつとめられ、縁切寺を題材に使った漫画や映画の監修もこなされたりと、八面六臂の活躍をされていた。学会では、法制史学会、比較家族史学会で活躍され、比較家族史学会では会長も務められた。

先生は中央大学大学院での修士論文以来、一貫して縁切寺・離縁状研究に取り組まれ、その研究は『縁切寺満徳寺史料集』(成文堂、一九七六年)、『縁切寺東慶寺史料』(平凡社、一九九七年)の二大史料集としてまとめられている。どちらも大部な史料集である。この他にも、『徳川時代後期家族法関係史料』(一)～(十五)と題する史料翻刻・解説を『専修法学論集』に発表されている。単著も多く、『縁切寺満徳寺の研究』(成文堂、一九九〇年)、『三くだり半と縁切寺』(講談社、一九九二年)、『増補 三くだり半 江戸の離婚と女性たち』(平凡社、一九九九年)、『泣いて笑って三くだり半 女と男の縁切り作法』(教育出版、二〇〇一年)、『徳川満徳寺 世界に二つの縁切寺』(みやま文庫、二〇一二年)などがあげられる。

先生の「三くだり半」研究は、戦前から通説とされていた「夫専権離婚制」について早くから疑問を呈したことにある。昭和五〇年代に法制史学会で行った研究発表の際には、御大の先生方からかなりの攻撃を受けたという。学会発表の席に、私はまだ参加しえない(大学生であった)段階であったが、当時入っていたのが鎌田浩先生のゼミナールであり、鎌田先生から学会での激しい論争についてお話を聞いた記憶がある。鎌田

先生が書かれた「江戸時代離婚法の再検討 いわゆる夫専権離婚制への疑問」(『牧健二博士米寿記念 日本法制史論集』所収、一九八〇年)について、「美味しいところを全部書かれてしまった」と嘆かれたことなどもお聞きしている。先生の豊富な史料発掘とその精査によって、妻方からの離婚請求がありえたことが指摘され、学説的には近年、夫専権離婚制を打破した論を「鎌田・高木説」と称するようになり、日本史教科書の記述も大分変わってきた。日本各地の三くだり半も歩まれ、様々な離婚状の実態について論考された。また、明治大正期まで離婚状の授受が行われていた事例など、多彩な離婚状研究を展開された。

「三くだり半」は、先生のエリアであり、他の誰も踏み込めない聖域であったというべきであろう。

2 高木先生との個人的な思い出

私の前任が高木先生であるが、先生には日本法制史の前任・後任の関係になる前から、可愛がっていた。た。

大学院博士後期課程に在籍中、私は初めて法制史学会の研究大会(当時は年二回の開催で、地方で秋に行われることが多かった)で発表することになっていた。京都への出発前夜、先生から自宅に電話をいただいた。何事かと思いながら電話に出ると、

「ああ、高木です。私は別件があつて今回の学会には参加できないんだよね。緊張して大変だと思うけど、気負わずに頑張ってください。色々言われると思うけど、それも良い経験になるから。」

という、激励であつた。わざわざお電話をいただき、恐縮したものである。先生はこういった気遣いをなさる方であつた。

学会や学内で会うたびに、また、毎年いただく年賀状には必ずといってよいほど

「寄り道をせず、決めたテーマに打ち込むこと」

との言葉をいただいた。この点に関しては、先生の言葉に背くようなことを常々しているような気がしてならないのであるが、仕方のない奴だなあと苦笑されているように思う。

専修大学を定年退職されたのち、専修大学大学史編集主幹の仕事で、大学に來られた際にお会いすると、

「今はどんなことをやってるの? 研究したら、どんどん活字にすること。専修大学は年に三回も論文を出

せるんだから、全部出す気でやりなさい。」と叱咤激励されるのが常であった。

先生と最後にお会いしたのは、亡くなられる一か月前の、一〇月一七日である。

科研の打ち合わせで、夏の熊本での史料調査の成果と今後の課題について話し合った。先生は夏の調査に参加されなかったもので、春休みにでも松本辺りに調査へ行こうか、との話も出ていた。その後、しばし雑談をしている中で、先生が史料のコピーを出された。勿論、「三くだり半」関係のものである。

「この志賀っていう人が、会津藩の人だと思っただけど、調べられるかな？」

私はたまたま、このすぐ後に会津へ史料調査に行く予定であったので、確認することを承った。先生は、急ぎではないけど、わかる範囲でよろしくと言われ、間もなく、

「じゃあ、私はこれで。今日はもう帰るよ。」

と言つて、いつも通りにコートを着、帽子をかぶって大学史資料課を後にされた。その背中が、何かすごく小さく感じられた。

会津藩家中の者を調べるのに役立つ『諸士系譜』であるが、藩士のすべてが載っているわけではない。が、下調べの中で三つの志賀家を見つけることができた。先生にはメールでその旨お知らせをした（一〇月二六日）。いつもなら、「メール拝受。」という返信が早々に先生から来るところであるが、今回は来なかった。今思えば、その頃には具合が悪かったのかもしれない。同月二九日に会津図書館で関係史料を確認・コピーをし、先生にはいつ頃お渡ししようか、それとも読んで活字にしまった方が良さだろうか、などと思いついてしまった。その中で先生の計報が届いた。

古文書史料コピーは今も私の手元にある。この史料のうち、どれが先生の求めるものだったのかはわからないのだが、その答えを聞くことはできなくなってしまった。この宿題は、永遠に宙ぶらりんである。残念でない。

これからも、「どんどん活字にすること―」という先生の言葉を大切にしていきたい。

高木先生、有難うございました。どうかゆつくりお休みください。合掌。